



患者さんのおなかを見て、聞いて、感じていきましょう！

評者 横江正道 日本赤十字社医療事業推進本部医療の質・研修部

今や、OSCE を経て医学部を卒業し、病歴聴取や身体診察を着実に活用して診断推論ができる研修医が増えてきています。DX や AI 時代に逆行しているようにもみえますが、やはり、医師として身体診察は“基本中のキホン”です。採血して CT さえ撮影すれば診断がつく！ というわけにはいかないことも多々あります。でも、身体診察って……。きっと、医学生時代には大切だと言われて、研修医時代もやるにはやったけれど、どこまで正しいのか、どこまで役に立っているのか、わからないままに今も医者やっています、という人は意外に多いのではないのでしょうか。

だって、どこを触るのが正しいのか？ どう触るのが正しいのか？ 触ったときの感触は人によって違うなど、なんだか客観的ではないことも事実です。ましてや、ちゃんとした人（笑）に教わるかどうかは非常に重要です。その学びの違いで、身体診察の不確定要素に翻弄されている先生もまた、きっとたくさんいると想像します。

本書の著者である中野弘康先生は、大船中央病院の ism を身につけ、腹痛に関する身体診察にまつわる心配部分を十分に汲み取って、身体診察のすごさや面白さを炸裂させています。

しかも、診察時の身体の写真と、エコーや CT の画像が対比された構成になっており、画像所見が身体診察ではどのような所見につながっているのかが明快に示されています。また、文字だけでは伝わりにくい、視診・聴診・打診所見が QR コードを読み取ることで、Audio & Visual として実体験できます。ひととおり、本書の内容をマスターしたら、きっと、今まで自信がなかった身体診察についても、次の腹痛の患者さんにやってみようという気になるでしょう。

個人的には、第2章「漢方フィジカル」がとても新鮮で、面白く拝読しました。特に心に響いたのは、「腹診は患者と心を通わせるものであり、心地よい腹診はそれと自体が患者を癒し、信頼関係の構築に結び付く」の一文です。患者の身体に医師が触れることの意味を常に考えていれば、CT さえ撮ればという診察にはならないはずです。

ですが、ですが、ですが、身体診察は、やはり、やってみてなんぼのものです。当たるか外れるかはあるものの、やはり当てにいく身体診察の腕を磨くには、理論のみならず実践あるのみです。そして、画像診断でそれらしい所見がない腹痛こそ、身体診察のパワーが問われるときです。診断は白血球と CRP と CT ではありません。身体診察は知れば知るほど楽しくなります。ぜひ、「おなかの身体診察」の一步を本書から学び取り、患者さんのおなかを見て、聞いて、感じていきましょう！

G



《ジェネラリスト BOOKS》
集中講義！
おなかの身体診察
 フィジカル&腹診で
 腹部症状に立ち向かえ

中野 弘康＝著

定価：4,950 円（本体 4,500 円＋税 10%）
 A5・240 頁／医学書院／2025
 [ISBN978-4-260-05786-8]